

はじめに

中国国内で、海外のITサービスの多くにアクセスできないことは周知の事実だ。政府はGoogle検索やYouTube、Twitterといったサービスを締め出し、監視・検閲ができる自国の企業に、百度バイドゥや优酷ユーイク、微博ウェイボなど、同様のものを提供させている。

中国人は、自分たちがそのような状況に置かれていることを理解しているが、世界標準のサービスにアクセスできない現状に対して、声を上げる者はほぼいない。国内企業によるサービスはひじょうに洗練されており、人々はそこに特段の不満を感じていないからだ。

なぜ中国ローカル企業が、世界的IT企業に引けを取らないものを提供できるのかといえ、それはもちろん、閉じられた14億人もの巨大市場があるからだ。最近まねは真似をするだけでなく、独自開発のサービスがアジアを席卷する例も出始めた。これも巨大市

場が目の前にあるので、事業者は思い切った投資ができるということだろう。

現代中国のパワーには驚かされるばかりだが、その力の源泉は、ここで見たように圧倒的な人の多さにある。では、中国はなぜこれほど桁違いの人口を擁しているのか。言い換えれば、それだけの人が生活する、目のくらむほど広大なエリアをなぜ支配できているのか。

中国人が人種的に均質だから、という回答には説得力がない。中国に住む人々は実に多様である。

実際に訪れてみるとわかるが、北方は背の高い人が目立つ一方で、南方は日本人と同じくらいの体格の人が多い。容貌も、東方の人々は日本人と似ている印象を受けるが、南方へ行けば東南アジア系の顔立ちの人が目立つし、西へ向かえば中東系の彫りの深い人が多数派になり、時には青い眼をした金髪の中国人に出会うこともある。気候は北と南で著しく異なり、文化や風習も地域差がひじょうに大きい。各地で話されている言語はそれぞれまったくの別物で、会話での意思疎通も困難なありさまだ。

以上のことを素直に読み取れば、中国大陸は現代でも複数の国が乱立しているのが自然、ということになるだろう。春秋戦国時代を舞台にした原泰久氏の漫画『キングダム』のように、7つの国が並び立っているような状況である。

だが、人類史上、中国ほど何度も統一された国はほかに存在しない。ローマ帝国は崩壊後、二度と再興しなかった。インド半島の大部分を平定したマウリヤ朝もアシヨーカ王の死後に分裂し、インド統一は近代に入るまで成し遂げられることはなかった。

それに対し、中国では魏晋南北朝の370年、五代十国の54年を除けば、基本的に2000年前から統一された状態にあった。気の遠くなるような期間にわたって、広大な領土と膨大な人口を支配することに成功し続けてきたのである。

世界中で中国でだけ、そのようなことが可能だったのはなぜだろうか。その淵源は、初の統一帝国・秦しんにある、というのが本書の主張である。

秦は始皇帝・嬴政えいせいが生まれる1000年ほど前に一大政治改革を行ない、国内のすべてのリソースを戦争に投じる体制を構築した。歴史の偶然と、既得権を持った「抵抗勢力」の反発を撥ね除けて改革を断行した「変革者」がいたために、楚そや齊せい、趙ちようといった

国とは完全に異質な国へと変貌し、中国大陸統一を成し遂げたのだ。

その改革の理論的支柱となったのが「法家」の思想である。

始皇帝は統一後、中国全土で法家にのっとった支配を行なった。その統治方法は、あまりにも強力かつ実践的なノウハウを含んでいたため、秦の滅亡後も2000年にわたって歴代帝国に引き継がれてきた。結果、中国は長期にわたって分裂することなく、伝統的に広大なエリアを支配し続け、現代も超大国の一角を占めている。

今の中国には、55もの少数民族が暮らしている。また、北京政府を良く思わない地方人もいるだろう。だが、彼らに反乱を起こさせず中央からの支配を徹底できているのは、中国共産党政府もまた、紀元前206年に滅亡した秦の遺産を強く受け継いでいるからなのである。

では、現代にもつながる中国の特異性をもたらした、法家の思想とはどのようなものか。そして、始皇帝はどのような統治を行なったのか。

『キングダム』は、古代中国史を専門とする私の目から見ても、歴史を詳細に研究して

描かれている。法家改革後の秦の体制についても、詳しく解説はされていないが、それを踏まえたストーリーが展開されている。

そんな、『キングダム』という物語の深いところを流れている地下水脈を、この本ではどんなに解説したい。それを知ることには『キングダム』をより楽しむだけでなく、中華人民共和国という現代日本の巨大なる隣人を理解することにもつながるはずだ。



齊王との対話で、嬴政は統一後の「法家による統治」に言及する（45巻）